

Title	パレスチナ/イスラエル地域政治の研究 - 民族・宗教・ 国家の現代的相関をめぐる考察(Abstract_要旨)
Author(s)	臼杵, 陽
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/123876
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	臼杵 陽
論文題目	パレスチナ／イスラエル地域政治の研究 －民族・宗教・国家の現代的相関をめぐる考察－		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東において大きな重要性を持つパレスチナ／イスラエルを対象として、中東地域研究の立場から、従来のパレスチナ政治、イスラエル政治を個別対象とする研究の限界を超えて、地域政治の実態を実証的に考察しようとするものである。対象地域は、現在の主権国家および自治区としては、イスラエル国、パレスチナ自治区、ヨルダン・ハーシム王国に相当する領域であり、歴史的には「南シリア」に相当するこの領域を本論文では「パレスチナ／イスラエル」と呼んでいる。</p> <p>第Ⅰ章では、当該地域を対象とする中東地域研究において踏まえるべき認識論的、方法論的な諸問題が検討されている。特に、他者の表象、民族と国家をめぐる枠組み、「国民国家」の相対化の必要性、民主主義とマイノリティ問題などに焦点が当てられている。</p> <p>第Ⅱ章では、中東戦争とパレスチナ問題をめぐる地域政治を取上げ、1950年代から70年代に至る時期を中心に、ユダヤ人移民問題、ヨルダン政治危機、第三次中東戦争を転機とするパレスチナ解放運動の展開などに焦点を当てて、当時の国際関係の中に当該地域がいかに関与されていったかについて考察がなされている。</p> <p>第Ⅲ章では、パレスチナ近現代史におけるナショナリズムとイスラームの動態的な相互関係について、オスマン朝末期からイギリスが支配した委任統治期を中心に論じられている。そこでは、この時期におけるパレスチナ社会の変容を踏まえながら、アラブ民族運動が原初的な萌芽期からやがてイデオロギー的に明確な姿を取るようになる過程が分析されている。</p> <p>第Ⅳ章では、パレスチナにおける共産主義運動の歴史的な展開を概括した後、国際的な共産主義とパレスチナ共産党が民族問題、パレスチナ問題にどのように対応したのかを分析している。また、イラクにおけるユダヤ人の反シオニズム運動と共産主義、次いで、パレスチナにおけるアラブ知識人と共産主義、さらに、1982年のパレスチナ共産党の成立を実証的に考察し、この地域における共産主義運動が民族問題に対して矛盾した立場をとったために国家と民族がねじれた相関関係に陥ったことを明らかにしている。</p>			

第Ⅴ章では、この地域におけるナショナリズムと宗教の関係について、新しい研究動向を概観し、戦争の記憶や聖地エルサレムの位置づけがどのようにナショナリズムに回収されて、紛争を解決不能な方向へ強化しているかについて、論究されている。

第Ⅵ章では、ヨルダンにおいて、その人口の過半を占めながらも等閑視されてきた離散パレスチナ人が、実際には政治的に積極的な役割を果たしてきたことが実証的に明らかにされるとともに、ヨルダンにおいてパレスチナ問題が国内問題であると同時に外交問題であるとの二重性を持っていることが明確にされている。

第Ⅶ章では、宗教と民族の相関性について、イスラエル国家における超正統派ユダヤ教宗教政党などを取り上げて、1970年代以降のユダヤ教復興がイスラエル政治を大きく変容させてきたことが明らかにされている。

終章では、本論文の立論を総括し、パレスチナ／イスラエル地域政治の基本的特質が6点に集約されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中東地域を理解する上でも中東における紛争ならびに和平の問題を考える上でも欠かすことのできない政治的重要性を有しているパレスチナ／イスラエルを対象として、その地域政治の実態を明らかにすることを目的として、特に民族、宗教、国家の現代的相関に着目して考察をおこなったものである。

本論文では、パレスチナ／イスラエルという対象地域を研究するにあたってのアプローチ上の諸問題を中東地域研究の立場から明らかにし、個別の主権国家と中東地域政治との相関関係を、アラブ・ナショナリズムとアラブ・イスラエル紛争の文脈で国際政治的アプローチから検討した上で、第二次世界大戦までの近代パレスチナ／イスラエル地域におけるナショナリズムの起源と発展を宗教との動的な相関関係を踏まえて考察し、さらに、そこにおける民族問題の矛盾について、当該地域の歴史的な共産主義運動との関連において考察し、近年のナショナリズムと宗教の相関関係をめぐる新しい状況についても分析を加えている。また、パレスチナ／イスラエルと相補的關係をなすヨルダンについて、従来の国家単位の分析を超えて、パレスチナ問題がヨルダンの国内問題であると同時に対外問題であるという二重の性格をもっていることを明らかにしている。さらに、宗教と民族の相関関係をパレスチナと比較しつつ主にイスラエルという具体的な場で考察することを通じて、ユダヤ国家イスラエルが持つ構造的な矛盾について解析をおこなっている。

本論文の貢献は、何よりも、従来の中東地域研究においてアラブ側とイスラエル側が個別に扱われてきたことの限界を超えて、両者を総合的に研究した点にある。それは、歴史的な「南シリア」に相当するパレスチナ／イスラエル、ヨルダンを相関的に論じる視座を確立したこと、アラビア語文献とヘブライ語文献の両方に対して綿密な調査をおこなうことによって、達成されている。原典資料を用いることは地域研究においては重要な作業であるが、アラビア語とヘブライ語の資料を合わせて用いる研究者は国際的にも少なく、本論文はその点で大きな意義を有している。

また、ヨルダンをパレスチナ／イスラエルに相関させたことは、大きな貢献となっている。ヨルダン研究はヨルダン一国を単位としたものが多く、本論文のアプローチは高く評価される。また、ヨルダンにおけるパレスチナ人の実態について実証的に明らかにしたことも、新しい知見として大きな意味を持っている。

方法論的な観点からは、近現代史という歴史学の方法と現地における臨地研究を結合させている点が非常に高く評価される。前後 30 年にわたるフィールドワークにおける観察の成果が、本論文の随所に表れている。

パレスチナ問題をめぐる共産主義運動の動向に関する調査と考察も、研究上の空白を埋めるものであり、国際的な共産主義運動とパレスチナにおける共産党が民族問題について取った立場の矛盾についての検証も有意義な知見を生んでいる。

ユダヤ教における宗教復興および超正統派ユダヤ教政党に関する知見と、それに基づくイスラエル国家が内包する構造的な問題についての考察も、この地域に対する従来の研究に見られた世俗主義的な分析の限界を超える知見を提供するものとして、特筆に値する。聖地エルサレムをめぐると問題がナショナリズムに回収されることの問題性を論じた部分も傑出しており、中東和平の困難さについて認識を深めることをおおいに助けるものであろう。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 21 年 1 月 23 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降